OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国人日本語教室学習者の日本語談話におけるフィラーの出現位置 : 外国語環境習得と第二言語環境習得の違いに着目して
Author(s)	冷, 羽涵
Citation	阪大日本語研究. 2025, 37, p. 75-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101121
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』37（2025）

中国人日本語教室学習者の日本語談話におけるフィラーの出現位置
外国語環境習得と第二言語環境習得の違いに着目して

The position of fillers in Japanese discourse by Chinese learners of Japanese in the classroom：
Focusing on the differences between second language acquisition and foreign language acquisition

冷 羽涵
LENG Yuhan

キーワード：フィラー、出現位置、学習環境、談話能力、ストラテジー能力

要旨

本稿の目的は、外国語としての日本語（JFL）環境と、第二言語としての日本語（JSL）環境にいる中国人教室学習者が使用するフィラーの出現位置や機能がどのように異なるのか、それが学習環境とどう関係するのかを明らかにすることである。学習者と日本語母語話者との自然談話におけるフィラーの出現位置を、「①発話文の冒頭」「②発話文の途中」「③発話文の末尾」「④不明」の４つに分類し、さらに①を「自発的開始部」（自ら発話文を始める際に現れるフィラー）と「返答開始部」（質問に答える際に現れるフィラー）、②を「交替後継続部」（話者交替後、自分の発話文を再開する際に現れるフィラー）と「発話中継続部」（自分の発話文の途中に現れるフィラー）に細分化して調査した。

調査の結果、JFL グループの学習者は「①発話文の冒頭」でのフィラー使用が多く、JSL グループの学習者は「②発話文の途中」、その中でも特に「発話中継続部」に偏って使用する傾向が見られた。形式に関しては、JFL グループの学習者は母語のフィラー「呃 (e ー)」を一貫して使用する一方で、JSL グループの学習者は「返答開始部」で「え (ー)」、それ以外の位置では「なんか」を多く使用し、位置による使い分けが確認された。

フィラーの出現位置および形式の違いは、両者の学習環境における自然な日本語との接触機会の差異が談話能力やストラテジー能力に影響を与えた結果であると考えられる。JFL グループの学習者は、自然な日本語との接触機会が限られているため、発話の組み立てや談話継続のスキルが十分に発達していないと考えられる。一方で、JSL グループの学習者は、自然習得環境や教室での豊富な交流を通じて、発話の途中での継続的な談話形成やフィラー形式の使い分けを身につける機会を得ていると考えられる。このことは、日本語接触の質と頻度が、学習者の言語運用能力の発達に重要な役割を果たすことを示唆している。

1. はじめに

本稿は、学習環境の違いが、中国人教室学習者が使用するフィラーの出現位置や機能[1)]にどのように影響するのかを明らかにするものである。日本語の「アノー」や「エート」、中国語の「嗯(en)」や「那个(na ge)」などのように、発話全体の意味に影響を与えない音声表現は、日本語ではフィラー（filler）と呼ばれている。フィラーは、自然な日本語会話においてなくてはならない存在であり、円滑なコミュニケーションを促進するために大きな役割を果たし、その重要性は多くの研究で指摘されている（山根 2002 等）。

こうしたフィラーの使用は、学習者が置かれた学習環境に大きく影響されると考えられる。Ellis（1994：12）は、外国語環境と第二言語環境の違いが、何が習得できるか、またどのように習得するかに大きな影響を与えると述べており、この点は「第二言語習得（Second Language Acquisition、以下、SLA）」研究において重要な課題となっている。例えば、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国人学習者）が日本語談話において中国語フィラーを使用することがあるが、この現象は主に中国で外国語としての日本語（Japanese as Foreign Language：以下 JFL）環境にいる学習者に多く見られ、逆に日本で第二言語としての日本語（Japanese as Second Language：以下 JSL）環境にいる学習者にはあまり見られないとされている（冷 2024）。さらに、次の例に見るように、JFL グループと JSL グループの学習者の間には、フィラーの出現位置に違いが見られる場合がある。その一例として、JFL グループの学習者（C5）と JSL グループの学習者（J4）を挙げる。以下、発話例の記載にあたっては、「53-1」のような数字の番号はそれぞれの談話における「発話文番号」を表す。注目する行は矢印で示し、注目するフィラーには全て下線を引いている。

（1）日本のアニメにおける声優の声について

→ 52　C5　≪沈黙 3 秒≫呃 (e) ー、多変 ??[↑]。

→ 53-1　C5　≪沈黙 1 秒≫呃 (e)、就是 (jiu shi)、いろいろ „

54　NS1　うん。

→ 53-2　C5　発音を発して ‘ はして ’、呃 (e) ー、素晴らしいと思います。

（2）一番大変だったことについて

→ 503-1　J4　あの時は確かに、なんか中国いる時に、まあ、≪少し間≫ストレスとかもー „

504　NS2　うん。

503-2　J4　あったけど „

505　NS2　はい。

503-3　J4　やっぱり一番苦労の時は、やっぱり、そう、一昨年です＜笑い＞。

例（1）と（2）では、C5 は発話を始める際に、J4 は発話の最中にフィラーを使用する傾向が見られる。しかし、フィラーの出現位置が学習環境とどのように関連しているかは、まだ十分には解明されていない。

そこで本稿では、中国語を母語とする JFL と JSL グループの学習者のフィラーの出現位置を調査し、学習環境がフィラーの出現位置に与える影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、学習者のフィラーが会話でどのような位置において使用されるかを談話的に分析し、学習環境の違いによるフィラーの出現位置の差を中心に検討する。

本稿の構成は、次の通りである。2 節では先行研究を概観し、本研究の位置づけを明確にする。3 節ではデータ収集と分析の方法を説明する。4 節では分析結果を示し、5 節ではその結果について考察を行う。6 節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

本節では本稿のテーマに関係する、日本語学習者のフィラー習得と学習環境との相関（2.1）、フィラーの出現位置（2.2）に関する先行研究を概観する。次いで 2.3 で、それを承けて、問題点と本稿の目的について述べる。

2.1. 日本語学習者のフィラー習得と学習環境との相関

日本語のフィラーに関する研究には多くのものがあるが、学習環境と学習者のフィラー習得との関連について調査した研究は、フィラーの頻度や形式を取り上げたものに限られており、全体的に非常に少ない。Iwasaki（2011）は、レベルの異なる英語圏の学習者 5 名を対象に、日本への 1 年間の留学を通じてフィラーの使用がどのように変化するかを調べた。この研究では、来日前後の談話データを分析し、結果として、留学した後にはフィラーの使用頻度が減少したが、フィラーの種類は増加したことが明らかになった。また、個人差があることも指摘されている。さらに、留学前は主に認知的なフィラー（例えば、ためらいや言い淀み）を使用していたが、留学後は社会的に有用なフィラー（例えば、否定的な評価を和らげるもの）の使用が増えたとしている。

また、学習者のフィラー習得を縦断的に調査した研究には、石黒(2022)がある。この研究では、北京日本語学習者縦断コーパス[2)]（Beijing Corpus of Japanese as a Second Language、以下、B-JAS）のインタビュー部分を使用し、大学入学後に日本語をゼロから学び始め、留学前の JFL 環境および留学中の JSL 環境の両方で日本語を学習した中国語母語の学習者 3 名を対象に、フィラーの習得を縦断的に調査した。3 年半にわたって収録した 7 回の談話データを

分析した結果、次のことが明らかにされた。まず、中国で日本語を学び始めた段階では中国語フィラーが多く使用されていたが、学習が進むにつれて日本語フィラーに移行することが分かった。また、学習が進んだ段階において、中国語フィラーと音声的に似ている日本語フィラーが多く使用され、「あのー」や「えーと」は留学前までに習得されていた。「なんか」「そのー」「まあ」は留学中に習得されたが、留学後には中国語フィラーがほぼなくなり、特定のフィラーへの偏りが減少し、より多様なフィラーが使用されるようになった。

冷（2024）は、中国人日本語学習者 10 名（JFL と JSL グループの学習者各 5 名）を対象に、初対面の日本語母語話者との自由談話を用い、JFL 環境か JSL 環境かの違いがフィラーの使用に影響を与えるかどうかを調査・分析した。その結果、フィラー全体の使用回数には、JFL 環境か JSL 環境かの違いによる差は見られなかったが、日本語フィラーの使用には違いが見られた。具体的には、使用頻度では、JSL グループの学習者の日本語フィラーは JFL グループの学習者より有意に多かった。種類別に見ると、JFL グループの学習者は音声型フィラー、JSL グループの学習者は語彙型フィラーを多用していることが分かった。また、中国語フィラーに関しては、JFL グループの学習者に多く見られ、その理由として社会的要因（①日常の会話環境が中国語環境であること、②談話において中国語の使用が許容されること）、および言語的要因（③両言語の談話における類似した位置に出現すること、④言語転移の可能性）が挙げられたが、特に社会的要因のほうが働いていることが明らかになった。

2.2. フィラーの出現位置

フィラーの出現位置は、単に形式的な配置の違いを示すものではなく、話者の談話能力やストラテジー能力を反映する重要な要素であると考えられる。特に、JFL と JSL グループの学習者のフィラー使用を比較する際、出現位置に注目することで、両者の談話能力やストラテジー能力の違いを明らかにする手がかりとなる。

これまでの研究においても、フィラーの出現位置が談話の進行や展開に与える影響が注目されている。以下に、フィラーの出現位置に関連する主な研究を表 1 に整理し、それぞれの特徴を示す。表は発表年順に配置しており、母語話者のデータを分析対象とする場合にはインフォーマントの記載を省略している。

表 1 フィラーの出現位置について言及のある研究

塩沢（1979）	フィラーの出現位置に基づく機能分析。 ①文頭：文の調子を整える役割を果たす。 ②文中：次に言う内容を考えながら、言葉選びをする。 ③話者交替のフィラー：相手の注意を引く、口ごもりを示すなど。
加藤（1999）	「まあ」の出現位置による機能の違い。 ①発話の冒頭：きっかけや導入の機能。 ②発話の途中：補足説明や間つなぎの機能。 ③発話の最後：締めくくりや結論を示す。
上田（2005）	テレビ番組の談話におけるフィラーの出現位置を分析。 ①発話の冒頭：聞き手の注意喚起。例：「あのー」「えっと」「なんか」など。 ②発話の途中：考えや表現の模索。例：「えっと」「うーん」など。 心的態度の表出。例：「まあ」「なんか」など。 言い換えや訂正、示唆。例：「まあ」「あのー」など。
中島（2011）	フィラーが談話の進行や展開に与える影響。 ①発話頭：談話進行を管理する（主には i 発話境界の明示、発話の切り出し、発話権の維持、 ii 前の発話の補正、 iii 心的態度の表出などがある）。 ②発話中：発話展開に関与する（主には i 間つなぎ語、 ii 注意喚起「あのー」、 iii 心的態度の表出（気づき・思い起こし「えっと」・和らげ「あのー」・ためらい「んー」「うーん」などがある）。 ③発話末：言いよどみやいいさしの標識を示す（主には i 言い淀み・言いさし、 ii 発話終了「はい」「うん」）。
百瀬（2018）	NHK インタビュー番組における指示詞「あのー」「そのー」の出現位置を調査。 ①「あのー」は文頭にも文中にも現れるが、「そのー」は文中にしか現れない。 ②「あのー」「そのー」の出現位置によって機能が違う。
劉（2023）	中国人 JFL グループの学習者（中級：N1 未取得、上級：N1 取得、各 30 名）によるフィラー「あのー」「えーと」「まあー」「なんか」「あー」の出現位置の傾向。 ①発話頭：発話や話題の切り出し機能。 ②発話中：時間稼ぎの機能。 ③発話尾：中級と上級の学習者は発話尾でフィラーを使用しない傾向。

このように、先行研究はフィラーの出現位置がどのように話者の談話進行やストラテジーに寄与するかを多角的に分析している。この視点を踏まえ、本研究では、JFL と JSL グループの学習者のフィラーの出現位置の傾向を比較することで、談話能力やストラテジー能力の違いを探り、これが学習環境の違いにどのように関連しているかを検討する。

2.3. 本稿の目的

2.1 と 2.2 で整理したように、先行研究では調査対象となるインフォーマントの母語やデータの収集方法、分析対象のフィラー形式に違いがあるものの、いくつかの重要な知見が明らかになっている。例えば①学習者の学習環境によって使用するフィラーの形式が異なること（冷

2024 等)、②フィラーの出現位置によってその機能が異なること（塩沢 1979 等）が多くの研究で指摘されている。また、「1. はじめに」で提示した例（1）（2）からも分かるように、学習者のフィラーの出現位置に学習環境の違いが関与している可能性が示唆されている。しかし、JFL と JSL グループの学習者におけるフィラーの出現位置の具体的な違いやそれと学習環境との相関関係については依然として未解明の部分が残っている。さらに、フィラーの出現位置の違いがフィラーの機能の違いを意味するとすれば、JFL および JSL グループの学習者のフィラー使用が、どのようにそれぞれの学習環境特有の談話能力やストラテジー能力を反映しているのかについての検討も必要である。この視点はフィラーの出現位置を単なる形式的な違いとしてではなく、学習者の言語運用能力全般の指標として捉える上で極めて重要である。

そこで本稿では、中国人教室学習者（教室学習者に絞った理由は 3.1 で述べる）を対象に、初対面の母語話者との自然談話を通じて、学習環境の違いがフィラーの出現位置および機能にどのような影響を与えるかを明らかにする。具体的には、以下のことを課題とする。

(a) JFL と JSL グループの学習者で、フィラーの出現位置や機能がどのように異なるのか。

(b) フィラーの出現位置および機能の違いと、それを生み出す学習環境の特性との相関関係は何か。

ただし、フィラーの機能の網羅的な分析については別稿を用意し、本稿では関連するところに限定して言及する。

3. 調査の概要と分析の方法

3 では 3.1 で調査概要を説明し、3.2 で分析方法について述べる。

3.1. 調査概要

本稿では学習者と母語話者の自然談話（30 分前後）を録音し、それを資料として使用する。学習者のフィラー使用に影響を与える要素として、談話の改まり度（塩沢 1979 等）、談話の種類（山根 2002 等）、留学歴（Iwasaki 2011 等）、日本語の習熟度（小西 2018 等）、母語（葛 2020 等）などが挙げられる。また、同じく第二言語環境にいても、教室指導環境か自然習得環境かによって習得が異なるとの示唆があった（Pica 1983、迫田・細井 2020 等）。以上を踏まえ、JFL と JSL の違いによる学習者のフィラーの出現位置の差を明らかにするためには、それらの変数を少なくする必要があると思われる。そこで本稿では、中国国内または日本国内のいずれかでのみ日本語を学んだ中国人学習者で、教室指導環境で日本語をゼロから学び始めて以来、調査時まで中国または日本のどちらかにのみ滞在している、N1 に合格している現役

学生 10 名（JFL、JSL グループの学習者各 5 名）を調査対象とする。なお、中国での学習者は全員が日本語を専攻としている。その他、本稿の調査対象となった学習者は以下の条件も満たしている。

・JFL グループの学習者（以下「C 学習者」、C は China の頭文字）
　1）中国でゼロから日本語を学び、調査時まで中国でのみ生活している
　2）中国語で日常生活を送り、日本語は限られた場面でしか使わない
・JSL グループの学習者（以下「J 学習者」、J は Japan の頭文字）
　1）日本で日本語をゼロから習い始めてから、調査時まで日本に滞在している
　2）日本語で日常生活を送り、中国語は限られた場面でしか使わない

各インフォーマントが受けていた授業および授業外での日本語接触の詳細を、それぞれ表 2 と表 3 に示している。学習者ごとの共通点および相違点を明確に可視化するために、横軸に各インフォーマントを配置し、縦軸に日本語接触状況の詳細を配置している。「教室学習期間」とは、教室などの場で正式に日本語の指導を受けた期間を指し、独学や仕事による日本語との接触期間は含まれない。「日本語接触歴」とは、単に日本語学習を開始してから調査時点までの期間を指すのではない。正式な教室での学習だけでなく、中国や日本の大学院への進学を目的としたテキストによる独学期間、あるいは進学前に日常的に日本語に触れていた期間も含むものである。JFL グループの学習者の詳細を表 2 に示す。「会話授業」のみは日本人教師によって行われるもので、大学 4 年間の時間に含まれる授業である。以下の情報は全て収録時のものである（以下同様）。C4 は、当初他専攻を希望していたが、点数が足りなかったため、中国の大学の「調整」という制度により日本語専攻に振り分けられた。また、() にある期間は、前の活動が続いた期間を示す。「NHK」は NHK のラジオニュースを表す。

表 2 JFL グループの学習者の詳細

	C1 女性・20 代	C2 女性・20 代	C3 男性・20 代	C4 女性・20 代	C5 女性・20 代
調査時の所属	院生	院生	院生	院生	院生
日本語学習動機	就職	趣味	趣味	調整	就職
教室学習期間	4 年 3 ヶ月	4 年 2 ヶ月	5 年 2 ヶ月	5 年 3 ヶ月	5 年 3 ヶ月
過去の日本語授業・会話授業の頻度	週 10-13 時間（主に中国語）	週 10-13 時間（主に中国語）	週 12-14 時間（主に中国語）	週 10-12 時間（主に中国語）	週 11-13 時間（主に中国語）
過去の授業外の日本語接触頻度	・週 1 時間（半年）留学生と交流	・週 20 時間（1 年）テキスト中心の進学の準備	・週 1 時間（半年）留学生と交流 ・週 3 時間（1 年 2 ヶ月）翻訳	・週 20 時間（1 年）テキスト中心の進学の準備	・週 15 時間（2 年 9 ヶ月）日本語を教える

日本語視聴	NHK	ドラマ	『紀行』	NHK	ドラマ
現在の日本語授業の頻度	週 6-8 時間（3 ヶ月）	週 6-8 時間（2 ヶ月）	週 6-8 時間（1 年 2 ヶ月）	週 6-8 時間（1 年 3 ヶ月）	週 6-8 時間（1 年 3 ヶ月）
現在の日本語の使用頻度	低	低	中	低	低
日本語接触歴	4 年 4 ヶ月	5 年 2 ヶ月	5 年 2 ヶ月	6 年 3 ヶ月	8 年

表 3 は、JSL グループの学習者の詳細である。J 学習者の「日本語接触歴」は、「日本滞在期間」と同じである。また、「人生の方向転換」は、中国での進学や仕事をやめ、それ以外の国で新たな人生の道を選ぶために日本語を学び始めたことを意味する。

表 3 JSL グループの学習者の詳細

	J1 男性・20 代	J2 男性・20 代	J3 女性・20 代	J4 男性・30 代	J5 男性・20 代
調査時の所属	大学生	大学生	大学生	研究生	大学生
日本語学習動機	人生の方向転換	人生の方向転換	趣味	人生の方向転換	進学
教室学習期間	2 年 6 ヶ月	3 年 9 ヶ月	5 年	5 年	6 年
過去の日本語授業・会話授業の頻度	週 15 時間（主に日本語）	週 15 時間（主に日本語）	週 15 時間（主に日本語）	週 10 時間（主に日本語）	週 15 時間（主に日本語）
過去の授業外の日本語接触頻度	・週 3 時間（1 年 1 ヶ月）サークルの人と交流	・週 2 時間（1 年）サークルの人と交流 ・週 25 時間（3 年）レジ等	・週 4 時（1 年 1 ヶ月）サークルの人 / チューターと交流 ・週 15 時間（3 年）レジ等	・週 20 時間（3 年半）レジ等	・週 3 時間（1 年）日本人と交流 ・週 3 時間（1 年 1 ヶ月）サークルの人と交流 ・週 5 時間（半年）レジ等
日本語視聴	NHK、YouTube	×	テレビ、NHK	×	NHK
現在の日本語授業の頻度	週 15 時間（1 年 1 ヶ月）	週 15 時間（1 年）	週 15 時間（1 年）	×	週 12 時間（3 年 5 ヶ月）
現在の日本語の使用頻度	高	高	高	中	高
日本語接触歴	3 年 1 ヶ月	3 年 9 ヶ月	5 年	5 年	6 年

表 4 は対話者情報である。NS1（Native-Speaker）は中国で学習した C 学習者の対話者であり、NS2 は日本で学習した J 学習者の対話者である。NS1 は中国に 10 年間住んでおり、日常的な中国語の会話に問題はないが、NS2 は独学で中国語を学んでおり、NS1 よりも中国語の会話能力が高い。なお、NS1 と NS2 が多少中国語を話せることは学習者には伝えていない。

表 4 対話者情報

話者 ID	性別・年代	出身地	現在地	職業
NS1	女性・30 代	姫路	中国・雲南	大学の日本語教師
NS2	女性・30 代	東京	日本・大阪	語学学校の日本語教師

談話のトピックについては以下のものを対話者に提示したが、より自然な談話を収集するために特に強制はしなかった。そのため、すべての話題を網羅するデータもあれば、1 つの話題から展開したものもある。しかし、すべての談話はいずれも準備のない即席の話 [3] である。

①お互いの自己紹介

②日本語を学習しようと思ったきっかけは何か？

③日本また日本語についてどう思うか？

④あなたの長所は何か？

⑤あなたの短所は何か？

⑥今までの人生で一番苦労したことは何か？

⑦今後の進路についてどのように考えているか？

また、各談話は 35 分から 40 分ほどであったが、調査を意識していると思われる冒頭と末尾の部分を除き、実際に文字化したのは約 32 分の音声データである。文字起こしは宇佐美(2019)の「基本的な文字化の原則（BTSJ：Basic Transcription System for Japanese）改訂版」に基づいて行なった。その理由は、「BTSJ」は談話を定量的・定性的に分析することが可能なためである。

3.2. 分析の方法

3.2.1 では、本稿で対象とするフィラーについて、3.2.2 ではフィラーの出現位置の分類について詳述する。3.2.3 では分析の視点を示す。

3.2.1. 本稿で対象とするフィラー

これまでの研究では、何をフィラーと見なすかについて見解が分かれている。本稿では、フィラーの出現位置を包括的に調査するため、既存の研究におけるフィラーの定義を検討した上で広範囲にわたるフィラーを扱った山根（2002）の定義をもとに、「フィラー」を以下のように定義する。

1）実質的内容が希薄で、それ自体が命題内容を持たず発話全体の意味に影響を与えない。

2）ほかの発話と応答関係・接続関係・修飾関係にない。

3）生起位置が統語的に制限されない。

4）時間稼ぎ的な言語表現であり、発話の一部分を埋める音声現象である。

以上の全ての条件を満たす言語項目を「フィラー」と見なす。例えば以下（3）で下線を引いているものがそれに該当する。

（3）昭和小説に興味がある理由について

127　NS2　なぜ昭和期の小説が、ん、に興味があるんですか？。

→128　J1　　そうすね、やっぱりなんか、その時期なんか変革が多くて、なんか、なんか文学に宿る感情も結構激しくて、なんかすごく印象に残ります。

129　NS2　うーん。

ただし、本稿では、山根（2002：49-51、132）でフィラーとして分類されている形式のうち、以下の①および②をフィラーとは見なさない。

①「ネー型」:「ネ」「イヤ」「ハイ」の長短など、話し手が聞き手の注目を集めようとして用いるもの。

②「ハイ型」:「ハイ」「ウ(ー)ン」「ホ(ー)ン」「フ(ー)ン」など、相手に打たれるのではなく、納得したり理解したりした時に自分めあてに打つもの。

その理由は、以下の通りである。例文後の番号とページは山根（2002）に準拠している。

①「ネー型」の例：これぐらいの長さがいるん ネー のどの奥へポトンと入れたら　（7）（p.50）

①において、「ネ」のような表現は、話し手が聞き手の注意を引いたり、会話の流れを促したりする意図を持つため、単なる時間稼ぎの表現とは言えない。そのため、本稿では「ネー型」をフィラーとは見なさない。

②「ハイ型」の例：やっぱりすごく　ソノ　小さい頃っていうのが　一番親の　ソノ影響が一番あるんだと思います　ハイ　（8）（p.133）

②のように、発話の最後に現れる「ハイ」のような表現は山根（2002）ではフィラーとして分類されている。しかし、このような表現は、話し手の内的反応を示すためのものと捉え、時間稼ぎ的な表現とは異なると考える。また、「ハイ」という形式は「ネー型」にも含まれるため、②のような「ハイ」は「ネー型」か「ハイ型」かの判別が難しい。これらの理由により、本稿では「ハイ型」もフィラーから除外する。

一方、山根（2002）における「母音型」については、本稿ではその用法に応じて分類し、一部をフィラーに含めない（③－ 1）一方で、別の一部をフィラーに含める（③－ 2）。以下に具体例を示して説明する。

③「母音型」：母音の長短

③－ 1 フィラーとしない「母音型」：ア　すみません　何かおみやげですか（例 11 p.132 ）

③－ 1 における「ア　すみません」のような「あ」は、山根（2002）でフィラーとして分類されている。しかし、これらは話し手の瞬間的な感情反応として使用されるものであり、心的

操作による言葉探しや時間稼ぎとは異なると考えられる。そのため、相手の発話を受け、自らの発話文の冒頭に使用される「ア」などはフィラーに含めないこととする。一方で、以下の③－2に見られるように、統語的な制約を受けず、発話を継続するために時間稼ぎとして使用される「エー」などの「母音型」は、本稿ではフィラーとして扱う。

③－2 フィラーとする「母音型」：エー まずちょっとこれ ざっと読んでみますと（1）（p.49）

なお、本稿で収集したデータには、日本語のフィラーだけでなく中国語のフィラーも含まれている。そのため、音声に忠実な表記を方針とし、日本語のフィラーはひらがなや漢字で、中国語のフィラーは中国語の漢字または対応する音声記号で示している。また、中国語で発話されたかどうかの判断は、筆者と中国語に堪能な日本語母語話者による総合判断に基づき、意見が一致しない場合（37 例）は分析対象から除外した。

3.2.2. フィラーの出現位置の分類

2.2 で示したように、これまでの先行研究では、フィラーの出現位置は一般的に「発話（文）の冒頭」「発話（文）の途中」「発話（文）の末尾」の 3 つに分類されている（中島 2011 など）。たとえば、中島（2011）は、①「発話（文）の冒頭」におけるフィラーは談話の進行を管理する役割を果たし、②「発話（文）の途中」におけるフィラーは談話の展開に関与すると述べている。また、塩沢（1979）は、②「発話（文）の途中」における話者交替後のフィラーが相手の注意を引いたり、口ごもりを示したりする機能を持つと指摘している。

本稿では、これら先行研究の分類を参考にしつつ、学習者のフィラー使用の特徴に焦点を当て、新たな分類を提案する。そのために、まず本稿における「発話」の単位および分類基準を明確にしておく。

「BTSJ」では、「実際の会話の中で発話された文」という意味で「発話文」という用語を使用する。「発話文」は談話分析（Discourse Analysis）の基本的な分析単位とされ、会話中の一連の意味を持つ「文」として認定されることになっている。ここでいう「文」とは、文法的に完結しているものだけでなく、会話の流れやその前後の相互作用を含む広義の概念である。たとえば、話者交替や間（ポーズ）の発生を基準に、文法的に完結していない「中途終了型の発話」や単語単位で発話された「1 語文」なども「1 発話文」として認定される場合がある。

本稿では、以上の基準に基づいて「発話文」を認定し、その「発話文」におけるフィラーの出現位置を以下のように分類した。

①発話文の冒頭：「発話文」の開始位置に現れるフィラー

②発話文の途中：「発話文」の進行中に挿入されるフィラー

③発話文の末尾：「発話文」の終了部分に現れるフィラー

④不明：上記の分類に当てはまらないフィラー、または複数の分類に該当するフィラー

以上の分類のうち①と②をさらに下位分類し、本稿におけるフィラーの出現位置の分類として、以下、表５のものを採用する。

表５フィラーの出現位置の分類

①発話文の冒頭
①-1「自発的開始部」：自ら発話を始め、その冒頭に現れるフィラー
①-2「返答開始部」：対話相手の質問[4]を受け、それに対する返答を開始する際に現れるフィラー
②発話文の途中
②-1「交替後継続部」：発話文の途中で、あいづち等を含む対話相手の発話が一時的に挿入された後、自分の発話を再開する際に現れるフィラー
②-2「発話中継続部」：自分の発話文の途中で継続して現れるフィラー
③発話文の末尾
④不明

表５のように、「発話文の冒頭」におけるフィラーは、自発的に発話を開始する場合と、返答として発話を開始する場合で機能が異なる可能性があるため、「自発的開始部」と「返答開始部」に細分化している。また、「発話文の途中」についても、話者交替後に再び自分の発話を再開する際に使用されるフィラーと、対話の流れを継続するために使われるフィラーを区別して「交替後継続部」と「発話中継続部」に分類している。このように細分化した理由は、学習者がフィラーをどのような場面で使用しているかをより正確に分析・把握するためである。以下では、学習者による会話例を挙げながら、それぞれの分類について説明する。

まず、次の（4）で、①「発話文の冒頭」と、②「発話文の途中」について確認する。

（4）日中のアイドルについて

97-2　NS1　え、じゃあ、中国のー、アイドルはそうではないんですか？。
→98-1　C4　んー、何というか„
99　NS1　うん。
98-2　C4　中国のアイドルが„
100　NS1　うんうん。
→98-3　C4　呃 (e)、い、同じような国ですから、その„
101　NS1　うん。
→98-4　C4　そのような、呃 (e)、そのような神秘感がありません＜笑いながら＞。
102　NS1　あー、そっかそっか。

例（4）において、98-1 の「んー」「何というか」は①「発話文の冒頭」に現れるフィラーであり、98-3 や 98-4 の「呃 (e)」「その」は②「発話文の途中」に現れるフィラーである。

また、①「発話文の冒頭」には主に 2 つのパターンが見られる。以下、これについて順を追って確認していく。

① -1「自発的開始部」：自ら発話を始め、その冒頭に現れるフィラー

（5）C3 の出身について

36　C3　私は「名前 1」と申します。
37　NS1　うん。
→ 38　C3　あのー、出身地は雲南省です。
39　NS1　うん［小声で］＝。

例（5）では、38 行のように、C3 は「あのー」の後も継続して発話を開始している。この場合、「あのー」は「発話文の冒頭」の「自発的開始部」のフィラーに当てはまる。

① -2「返答開始部」：対話相手の質問に対して返答を開始する際に現れるフィラー

（6）日本語学校に通っていた期間について

59-1　NS2　あー、じゃあ、その、最初に京都の語学学校に „
60　J2　はい。
59-2　NS2　入って „
61　J2　はい。
59-3　NS2　そこで何年間いたんですか？。
→ 62　J2　えーと、大体 4 年間。
63　NS2　あー。

例（6）で J2 は対話相手の NS2 の質問に対して、回答している。62 行目の「えーと」は、「発話文の冒頭」で相手の質問に回答する際に使用されたフィラーであるため、「発話文の冒頭」の「返答開始部」に該当する。

続いて、②発話文の途中のフィラーを見ていく。

② -1「交替後継続部」：発話文の途中で、対話相手の発話が一時的に挿入された後、自分の発話を再開する際に現れるフィラー

（7）C4 の趣味について

12-1　C4　え、嗯（en）、私の趣味はー „
13　NS1　うん。
→ 12-2　C4　呃 (e)、友達を作ることです＜ 2 人で笑い＞。
14-1　C4　呃 (e)、＜笑い＞そして暇なときはー „
15　NS1　うん。
→ 14-2　C4　呃 (e)、映画を見ることがー、≪少し間≫好きです。
16　NS1　うんうんうん。

17　C4　はい、んー、大体の状況は以上です＜笑いながら＞。
743　NS1　うんうん。

例（7）のように、C4 は発話している途中に、NS1 が相槌を打ち、C4 はフィラーを発した後も発話を継続している。そのため、「12-2」「14-2」ともに「発話文の途中」の「交替後継続部」に該当する。

② -2「発話中継続部」：発話文の途中で継続して現れるフィラー

（8）日本に来て良かったと思う点について

128-2　NS2　よかったと思うところは何ですか？。
130　J5　“よかったと思うところ”、えー…。
131-1　J5　≪沈黙 4 秒≫そうですね、思った通り‘とおり’だと思うので„
132　NS2　うん。
→131-2　J5　あんまりなんか、えー、そういう、なんか来てから„
133　NS2　うんうん。
131-3　J5　いいって点があまりない„
134　NS2　＜笑い＞そうですか。
131-4　J5　って感じです。

例（8）において、J5 は発話文の途中に「なんか」「えー」（131-2）を使用し、その後も発話を続けている。「なんか」「えー」は「発話文の途中」の「発話中継続部」に当てはまる。

次に、③発話文の末尾のフィラーを確認する。

③ 発話文の末尾：発話文の最後に現れるフィラー

（9）バーという表現について

74　NS2　あー、あのー、料理屋さんに行った時？。
75　J1　はい、なんか、えー、バール‘バー’に行った時。
76　NS2　えっ？。
→77　J1　酒を飲む場所、なんか。
78　NS2　あ、バーですか？。
79　J1　はい。

例（9）において、77 行目の「なんか」は発話の最後に使用され、「発話文の末尾」のフィラーと見なす。

一方、上記の①②③のいずれに該当するかを特定できないものとして、例えば以下のようなフィラーが存在する。本稿ではこれを④「不明」と分類した。

④ 不明：上記の分類に当てはまらないフィラー、または複数の分類に該当するフィラー

（10）日本に来た理由について

45　NS2　そ、そしてどうして、あのー、日本急に来たいと思ったんですか？。
→46　J4　そうですね、急になんか…。
47　J4　≪沈黙 2 秒≫何っていうか、あのー、仕事がー „

例（10）の 46 行目の「なんか」は言い差し文に使用されているので、その出現位置が「発話文の途中」であるか、「発話文の末尾」であるかが判別できない。そのため、このようなフィラーは、別のカテゴリーとし、「不明」に分類した。

3.2.3. 分析の視点

分析にあたって、出現位置の使用状況を量的に把握し、その形式を確認する手順を取る。具体的には、まず学習者のフィラー使用について、各グループのフィラーの出現位置を数値化する。この分析により、フィラーが「発話文の冒頭」「発話文の途中」「発話文の末尾」にどの程度出現するかを明確にし、その頻度やパターンを比較する。また、「発話文の冒頭」および「発話文の途中」において、それぞれどのケースがより多く使用されているか、グループ間にどのような違いが見られるかを調査する。さらには、この出現位置が学習者の学習環境とどのように関連しているかを検討し、学習環境がフィラーの使用に及ぼす影響を考察する。

4. 調査結果

ここでは、まず学習者のフィラー全体の出現位置を提示した上で（4.1）、フィラーの出現位置の下位類（4.2）、およびフィラーの出現位置と形式（4.3）について述べる。

4.1. フィラー全体の出現位置

本節では、学習者におけるフィラーの出現位置の特徴を視覚的に示し、学習環境によるフィラー使用傾向の違いを説明するため、図を用いてデータを提示する。フィラーの出現位置について、JFL グループを図 1 に、JSL グループを図 2 に示している。「%」はそれぞれの出現率を表し、小数点以下は四捨五入して整数値に変換している（以下同様）。フィラーの全体の使用例は 2434 件であり、そのうち JFL グループが 1070 件、JSL グループが 1364 件である。「発話文の末尾」でのフィラー使用は、JFL グループでは確認されず、JSL グループでは 2 例のみであった。いずれも割合が 1%未満であるため、図には表示していない。

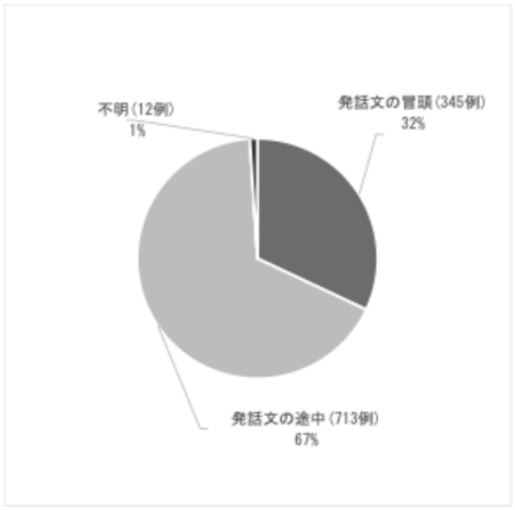

図 1　JFL グループのフィラーの出現位置

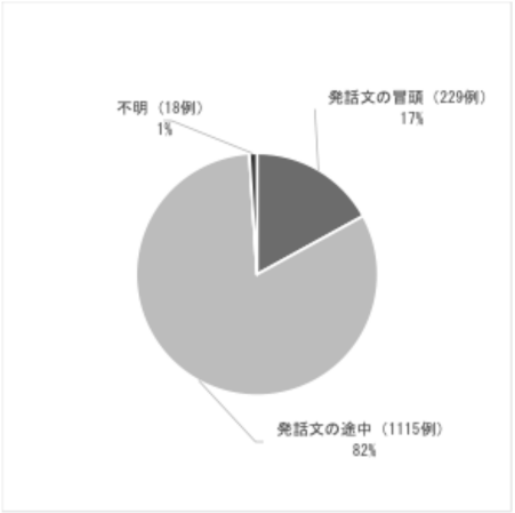

図 2　JSL グループのフィラーの出現位置

以上の図 1 および図 2 から次のことが分かる。

（A）フィラーの出現位置の全体的傾向：2 つのグループの学習者は、いずれも発話文の末尾でフィラーを使用せず、発話文の途中でフィラーを最も多く使用している（JFL グループ：67%、JSL グループ：82%）。

（B）発話文の冒頭：JFL グループ（32%）は JSL グループ（17%）よりフィラーの頻度が 15 ポイント高い。

（C）発話文の途中：JSL グループ（82%）が JFL グループ（67%）よりフィラーを 15 ポイント多用している。

以下、説明を加える。

（A）の全体的傾向については、発話文の末尾でフィラーを使用せず、発話文の途中で最も多く使用していることはこれまでの研究結果と一致しており（中島 2011、劉 2023 など）、本稿の JFL および JSL グループの学習者にも共通している。

（B）の発話文の冒頭については、JFL グループの学習者は、JSL グループの学習者に比べて発話文の冒頭でフィラーを多用する傾向がある。以下、JFL グループの学習者の使用例を参照されたい（11）。

（11）日本人と話す機会について

335-3　C4　日本人と話す機会が„
338　NS1　うん。
335-4　C4　あーんまり、≪少し間≫ない。
339　NS1　うん。
→340-1　C4　あー、あのー、［舌を弾く音］呃 (e)、具体的に言えば‘いれば’ „
341　NS1　はい。
340-2　C4　ないです。

例（11）では、C4 が新たに発話を始める際（340-1）、複数のフィラー（「あー」「あのー」「呃 (e)」）を連続して使用している。このフィラーは発話の開始を示すと同時に、聞き手に「これから話が続く」という合図を送り、話者が発言内容を整理するための時間を稼ぐ役割を果たしている。これにより、話者は自分の発話権を確保し、発話が途切れるのを防いでいる。一方、JSL グループの学習者は、このように新たな情報を追加する際に、発話文の冒頭でフィラーではなく、接続詞を多用している（12）。この点については改めて別稿を用意する。

（12）好きな作家について

141　NS2　好きな作家はいますか？。
142　J1　はい、一番好きのは太宰治さん。
143　NS2　あー、そうですか［「あ」は小声で］。
→144-1　J1　それと、三島、＜由紀夫＞ {<} „
145-1　NS2　＜由紀夫＞ {>} „
144-2　J1　とか „
145-2　NS2　うん［小声で］。
144-3　J1　尾崎とか、も好きです。

例（12）において、J1 は「一番好きな作家は太宰治さん」という内容を発言した後、補足を追加するために新たな発話を開始している。その際、J1 はフィラーではなく、「それと」のような接続詞を使用している。

以上のように、JFL グループの学習者には、発話文の冒頭で「あー」「あのー」「呃 (e)」といった複数のフィラーを多用する特徴が見られる。このような発話文の冒頭でのフィラーの使用は、話し手が発言の開始をためらっている様子や慎重に言葉を選ぼうとしていることを示している。なお、発話文の冒頭におけるフィラー多用の理由については 5 節で考察する。

（C）の発話文の途中については、JSL グループの学習者が JFL グループの学習者よりフィラーを多用している。以下、その使用例を示す（13）。

（13）語学の勉強について

207　NS2　えー、今日本語と同時にスペイン語も勉強してるってことですか？。
208　J2　あ、はい、そうですね。
→209-1　J2　研究は語学なんですけど、そんな、なんか日本語より、まあ、そんなに詳しくできないんですけど、まあ、話し合うことはたぶんできる„
210-1　NS2　おー„
209-2　J2　ようにかな、すね＝。

例（13）において、J2 は NS2 の「日本語と同時にスペイン語も勉強しているか」という質問に対して「はい、そうです」と簡潔に答えた後、その答えを補足し発話を展開させようとしている。その過程で「研究は語学なんですけど」と話を続け、発話文の途中でフィラー「なんか」「まあ」を挿入している。この 2 つのフィラーは、それぞれ異なる機能を果たしている。具体的には、「なんか」は発話者が不確かさを表明する場合や断定を避けたい場合に使用され（上田 2005 など）、一方、「まあ」は話の流れを円滑にし、発話の内容を柔らかくするために用いられる（加藤 1999 など）。J2 はこれらのフィラーを用いることで、補足説明を慎重に展開しながら、対話を円滑に進めようとしている様子が窺える。

以上のことから、JSL グループの学習者は発話文の途中で「なんか」や「まあ」などのフィラーを多用する傾向が見られる。個々のフィラー形式の具体的な使用頻度については 4.3 節で詳述し、これらのフィラーを多用する理由については、5 節で説明する。

4.2. フィラーの出現位置の下位類

本節では、4.1 で示した「学習者が発話文の冒頭や途中でフィラーを多用している」という結果に基づき、それぞれの位置で使用されるフィラーの出現パターンを確認する。「発話文の冒頭」と「発話文の途中」におけるフィラーの出現パターンを、以下の表 6 に示す。各パーセンテージは該当パターンが「発話文の冒頭」または「発話文の途中」に占める割合を示し、四捨五入して整数で表している。両グループに相違が見られたパターンに網掛けを施している。

表 6　発話文の冒頭および発話文の途中におけるフィラーの出現パターン

	発話文の冒頭			発話文の途中		
	自発的開始部	返答開始部	合計	交替後継続部	発話中継続部	合計
JFL グループ	221 64%	124 36%	345 100%	232 33%	481 67%	713 100%
JSL グループ	144 63%	85 37%	229 100%	172 15%	943 85%	1115 100%

以上の表 6 から次のことが分かる。

（A）発話文の冒頭では両グループ間の差（1 ポイント）はあまり見られないが、発話文の途中では差が見られる。

（B）両グループの学習者は発話文の冒頭では「自発的開始部」（JFL グループ：64%、JSL グループ：63%）、発話文の途中では「発話中継続部」（JFL グループ：67%、JSL グループ：85%）でフィラーを多用している。

（A）両グループ間の差については、発話文の冒頭ではほぼ見られないが、発話文の途中では比較的大きい。具体的には、「発話中継続部」では、先述の通り、JSL グループの学習者のほうが頻繁にフィラーを使用している。一方、「交替後継続部」では、JFL グループの学習者のほうがフィラーを多く使用している。以下に、JFL グループの学習者の使用例を示す（14）。

（14）中国文化に興味があるかどうかについて

405-2　C4　　先生は„

406　　NS1　はいはい。

→ 405-3　C4　　呃 (e) ー、嗯 (en)、呃 (e)、先生は中国の文化が好きですか？。

407　　NS1　はい、好きです＜笑いながら＞。

例（14）において、C4 は発話後、NS1 から相槌が挿入され、その後、C4 は「呃 (e) ー」や「嗯 (en)」というフィラーを使用して話を継続している。このように、話者交替後に現れるフィラーは、相手の注意を引いたり、口ごもりを示すだけでなく、発話のリズムを整えつつ、次に話す内容を調整する機能があるとされている（塩沢 1979、中島 2011 など）。このことから、JFL グループの学習者は、JSL グループの学習者よりも話者交替後にフィラーを使用して発話を再開し、対話の流れを維持しようとする傾向があることが示唆される。フィラーは、話者交替後の間を埋める役割を果たし、発話の流れやリズムを調整することによって、対話のスムーズさを保とうとする戦略的な役割を担っている。特に JFL グループの学習者がこの機能を活用して、母語話者とのコミュニケーションを円滑に進めようとしている様子が見受けられる。

（B）の発話文の冒頭については、JFL および JSL グループの学習者は、「自発的開始部」で多くのフィラーを使用している。このようなフィラーは、話題の導入や発話開始の合図として機能することが指摘されている（加藤 1999；中島 2011）。したがって、両グループの学習者は、発話を開始する際にフィラーを用いることで、コミュニケーションを円滑に進めようとする傾向があると考えられる。一方、「返答開始部」の使用頻度と比較すると、「自発的開始部」でのフィラー使用頻度は明らかに高い。しかし、この差異は、「返答開始部」、すなわち対話相手からの質問など、応答を求められる発話自体の数が少ないことに起因すると考えられる。

発話文の途中において、両グループともに「発話中継続部」でフィラーを多用しているが、

使用頻度には明確な差異が見られる。JSL グループの学習者は 85% であり、JFL グループの学習者(67%)よりも 18 ポイント高い。以下に、JSL グループの学習者による使用例を示す(15)。

(15) 一番大変だったことについて

178 NS2 ≪少し間≫えー、今まで、その、今まで生きてきた中で、あのー、一番大変だったことって、どんな、ありますか?。

179-1 J1 大変だったこと „

180 NS2 うん。

→ 179-2 J1 は―、ありますけど、まあ、なんか、高校の時なんか „

181 NS2 はい。

→ 179-3 J1 段々いろんなことを遭って、なんか自主的な思考を始めたからなんか、昔やったこと、知ったこと、を疑う［↑］ „

182 NS2 おー。

→ 179-4 J1 ことが始まって、なんか、すごくなんか、なんか、≪少し間≫闇というか、なんか、辛かったです。

183 NS2 へー。

例 (15) において、NS2 の「今まで一番大変だったことはあるか」という問いに対し、J1 は「大変だったことはあるけど」と肯定的に返答した後、具体的な説明を試みている。このことから、J1 が複文を用いて日本語の会話を行う傾向があることが示される。この傾向はほかの JSL グループの学習者にも共通して見られる。特にここでは、「なんか」というフィラーが頻繁に使用されているが、これは話題が比較的過去の出来事であり、その記憶が曖昧であるため、不確かさを示す「なんか」が多用されていると考えられる。「なんか」は、話者が記憶に確信を持っておらず、情報に対する不安や曖昧さを表現する手段として使用され、会話の流れを円滑に保つ役割を果たしている(上田 2005 など)。なお、複文の使用とフィラーの多用の関係についての詳細な検討は別稿にて行う。また、「発話中継続部」において JSL グループの学習者が JFL グループの学習者よりもフィラーを多用している理由については、5 節で考察する。

4.3. フィラーの出現位置と形式

4.2 の結果に基づき、JFL グループおよび JSL グループにおけるフィラーの出現位置と形式の詳細を、それぞれ図 3 および図 4 に示す。棒グラフには、使用頻度が高い上位 3 つのフィラーを多い順に記載している。「その他」[5] は、上位 3 つに含まれないフィラーの総使用回数を指している。このため、その種類は出現位置によって異なり、最多で 16 種類(「発話中継続部」)、最少で 6 種類(「交替継続部」)が確認された。なお、「その他」を設けた理由は、グループ全体

の使用状況を示すためである。

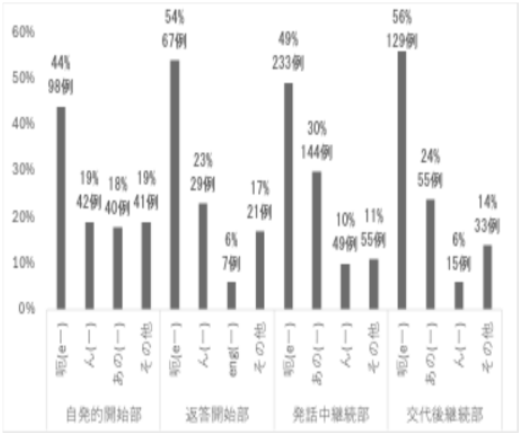

図 3　JFL グループのフィラーの出現位置と形式

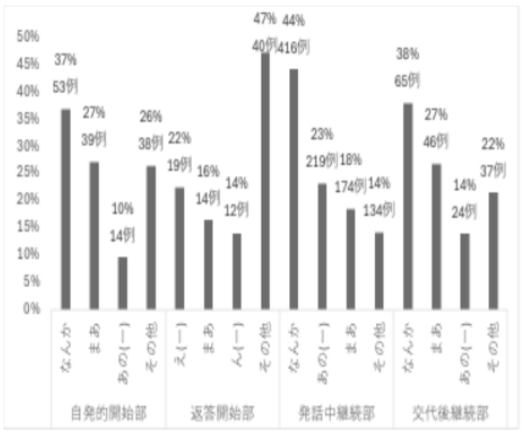

図 4　JSL グループのフィラーの出現位置と形式

図 3・4 から分かることをまとめると、次のようになる。

（A）全体的に、2 つのグループはすべての位置で一貫して「あの（ー)」というフィラーを二番目に多く使用している。

（B）出現位置におけるフィラーの形式について、JFL グループはすべての位置で一貫して「呃 (e ー)」、JSL グループはすべての位置で一貫して「なんか」を多用している（「返答開始部」を除く)。

（C）出現位置によるフィラーの使い分けについて、JFL グループではほとんど見られない一方、JSL グループでは「返答開始部」での使い分けが見られる。

（A）の全体的な使用傾向については、両グループにおける「あの (ー)」の使用傾向は類似しており、すべての位置で一貫して 2 番目に多い頻度で使用されている。しかし、JFL グループでは全体の 239 回中、C3 が 144 回を占め、JSL グループでは全体の 257 回のうち、J3 が 153 回使用している。このことから、「あの (ー)」というフィラーの使用には、個人差が顕著に見られることが示唆される。一方で、C3 および J3 のデータを除いた場合、両グループの使用傾向に若干の変化が生じる。具体的には、JFL グループでは「呃 (e ー)」の使用が最も多く、その次に「ん（ー)」が続き、「あの (ー)」は 3 番目に位置する。一方、JSL グループでは「なんか」が最も多く使用され、次いで「まあ」が続き、「あの (ー)」は同様に 3 番目に位置する。このような傾向から、「あの (ー)」の使用は学習者個人の特徴に強く依存し、学習環境（JFL と JSL）の違いによる影響は比較的小さい可能性があると考えられる。したがって、フィラーの形式にも注目する場合には、環境要因だけでなく、個人要因にも注目する必要があるだろう。

（B）の出現位置とフィラーの形式については、JFL グループの学習者はすべての位置で一貫して「呃 (e ー)」を最も多用しており、JSL グループの学習者は「返答開始部」を除くすべての位置で「なんか」を最も多用している。（16）は JFL グループの学習者の使用例である。

（16）『校閲ガール』というドラマが好きな理由について

→ 105-1　C5　　呃 (e ー)„

104-2　NS1　それも見た見た。

→ 105-2　C5　　呃 (e ー)、彼女は „

106　　NS1　うん。

105-3　C5　　ドラマの中で „

107　　NS1　うん。

→ 105-4　C5　　すご、呃 (e)、すごく、呃 (e ー)、fashion„

108　　NS1　うんうん。

105-5　C5　　fashion で…。

109　　NS1　うん。

→ 110-1　C5　　≪沈黙 2 秒≫呃 (e ー)、そして、呃 (e ー) 男優も呃 (e ー)„

111　　NS1　うん。

110-2　C5　　すごくかっこいいと思います＜笑い＞。

例（16）で C5 は『校閲ガール』というドラマの好きな理由を説明する際に、服装や俳優について述べようとしているものの、発話の流れが途切れがちで、その途中で英語を借用したり何度も母語のフィラーである「呃 (e ー)」を挿入したりしている。これにより、C5 は発話を一旦止め、内容を再構築しようとしていると考えられる。このように、発話内容を構築する際に直面する言語的困難や即座に適切な表現を選択することの難しさにおいて頻繁に使用される中国語フィラーの「呃 (e ー)」は JFL グループの学習者全員（C5 を除く）で確認されている。

しかし、JSL グループの学習者は、言語的困難さのためというよりも、一定の目的をもってフィラーを使用しているようである（17）。

（17）長所について

274　　NS2　≪少し間≫ちなみにご自身の長所と短所は何ですか？。

→ 275-1　J1　　あ、長所ねー、長所はなんか、なんか、物事について、なんかあらゆる視点から考える „

276　　NS2　うん。

275-2　J1　　力を持っています、とか…。

→ 277-1　J1　　それとも、聞く側としては、なんか自分が言 ‘ ゆう ’ ても „

278　　NS2　うんうん。

277-2　J1　　あれですけど、まあ、聞く側としては上手だと思います。

例（17）において、J1 は日本語表現を選ぶことに迷っているわけではなく、前述の通り、発話中の不確かさや曖昧さを示したり話し手自身の発言を柔らかくしたりするためにフィラー「なんか」を多用している。具体的には、「なんか」を使用することで、発話内容が確定していないことを相手に伝えたり、強い意見を避けて相手との調和を保とうとしている。また、JSL グループの学習者は発話の内容を組み立てたり日本語表現を選んだりする際に、JFL グループの学習者のように、音声型フィラー、特に中国語のフィラー「呃 (eー)」を多用する傾向は見られない。なお、この点についての詳細な理由は、5 節で検討する。

（C)のフィラーの使い分けについては、JFL グループの学習者は、4 つの出現位置において「呃 (eー)」「あの (ー)」「ん (ー)」といったフィラーを多用している。それに対し、JSL グループの学習者は、ほぼすべての位置で一貫して「なんか」「あの (ー)」「ん (ー)」を多く使用しているが、「返答開始部」で最も頻繁に使用されているのは「なんか」ではなく、「え (ー)」（19 例）というフィラーである。このことから、「あの (ー)」だけでなく、「ん (ー)」の使用も両者に共通していることが分かる。この現象の理由については、5 節で詳しく考察する。

5. 考察

本稿の目的は、学習環境の違いが学習者のフィラーの出現位置および機能にどのように影響するかを明らかにすることである。そこで本稿では、中国人教室学習者を対象に、初対面の母語話者との自然談話を用い、JFL と JSL グループの学習者の、フィラーの出現位置の傾向を調査・分析した。考察に当たっては、2 節で設定した以下の課題に基づき、分析を行う。

(a)JFL と JSL グループの学習者で、フィラーの出現位置や機能がどのように異なるのか。

(b) フィラーの出現位置および機能の違いと、それを生み出す学習環境の特性との相関関係は何か。

このうち (a) については、前節の分析によって、以下のことが分かった。

(a-1) 発話文の冒頭では、JFL グループの学習者が JSL グループよりフィラーを多く用いている。ただし、細分化した「自発的開始部」と「返答開始部」の割合を見ると、両グループ間には差は見られない。

(a-2) 発話文の途中では、JSL グループの学習者が JFL グループよりフィラーを頻繁に使用している。その中でも、JFL グループの学習者は「交替後継続部」でフィラーを多用し、JSL グループの学習者は「発話中継続部」に偏る傾向が見られる。

(a-3) フィラーの形式では、JFL グループの学習者は「呃 (eー)」を一貫して多用し、JSL グルー

プの学習者は「返答開始部」では「え (ー)」、それ以外の位置では「なんか」を多用する特徴がある。

本節ではこの結果を承けて課題 (b) に焦点を当て、JFL と JSL グループの学習者におけるフィラーの出現位置および機能の違いと、それを生み出す学習環境の特性との相関関係は何かについて考察を試みる。以下、上の（a-1）～（a-3）の順に述べる。

(a-1) 発話文の冒頭で JFL グループの学習者が JSL グループより多くのフィラーを使用している理由は、両グループの学習環境の違いによって培われたコミュニケーション能力、中でも特に談話能力に差があると考えられる。談話能力とは、複数の（発話）文によって談話を構成し、まとまりのある内容を効果的に作り出したり、あるいはまとまった内容のものを理解したりする能力を指し、JFL グループの学習者においては、以下に見るように、この能力が比較的弱い傾向が見られる。これは、JFL グループの学習者が主に中国で生活し、日常会話や授業中に日本語を使用する機会が限られているためであると思われる。

3 節の表 3 を見ると、JFL グループの学習者 5 人のうち、自然な日本語に触れている（例えば、日本人との交流、様々なメディアを用いての生の日本語との接触）のは C1 と C3 のみであり、それも週に 1 時間前後の頻度で半年間程度に留まっている。ほかの JFL グループの学習者（C2、C4、C5）も日本語と接する機会を増やすために、NHK のラジオニュースやドラマを試聴したりする工夫を試みていたが、それらの材料は事前に作られているので、自然な日本語会話において出現するフィラーを耳にすることが比較的少なく、それによりフィラーの発達が遅れていると想定される。また、今回の日本語談話調査は初対面の日本語母語話者との間で行われ、しかも、言語的にも日本語は普段話している言語である中国語と大きく離れているため、彼ら／彼女らが抱いている不安や戸惑いは大きいと考えられる。その根拠として、談話において、C1 の「私の話し言葉があまり上手ではないです」や C3 の「僕は緊張しやすいタイプです」といった発言があることが挙げられる。これらのような要因が絡まった結果、JFL グループの学習者は日本語談話において話題展開や情報構成に不安を感じており、発話文の冒頭でフィラーを多用し、発話を始めるための時間を稼ぐ傾向が強かったものと思われる。

4.1 で挙げた（11）のように、JFL グループの学習者（C4）は発言した内容を補足しようとする際に、発話文の冒頭において、「呃 (e)」といったフィラーを用いてその話題や発話へと繋ごうとし、その後に話の内容を組み立てていく傾向がある。一方、JSL グループの学習者（J1）は同じ状況でフィラーより接続詞を用いて言いたいことや話題へと進行していた。なお、フィラーと接続詞の関連については別稿で検討する。

以上のように、JFL グループの学習者は情報の組み立てや発話の流れを維持する談話能力において、発展途上にあることが示唆される。

(a-2) 発話文の途中において JSL グループの学習者が JFL グループの学習者より多くのフィラーを使用している理由は、上の（a-1）で述べた JFL グループとは逆に、JSL のコミュニケーション能力、特に談話能力の高さに起因すると考えられる。そう考えられる根拠を次に述べる。

まず、JSL グループの学習者は日本に留学しており、教室習得環境と自然習得環境の両方のメリットを併せもつ環境にいるため、JFL グループの学習者に比べると自然な日本語に晒されることが非常に多いことが挙げられる。3 節の表 3 を見ると、JSL グループの学習者は様々な場面で自然な日本語に触れていることが分かる。具体的には、高い頻度で（週に 10 時間以上）日本語による授業を受けているほかに、様々な活動を通じて自然な日本語と接している。例えば、JSL グループの学習者 5 人のうち、4 人がサークルの仲間と定期的に交流しており、週に 10 時間以上の長さでアルバイトを続けている。さらには、J5 のような学校や地域の日本語コーナーに積極的に参加しており、日本人を相手にマンツーマンの日本語会話を週に 3 時間ほど 1 年間以上続けていた学習者もいる。このような学習環境では、JSL グループの学習者は日本語による会話に親しんでいるため、発話や話題を展開させたり、言いたいことをまとまった形で表現したりする能力が高いと考えられる。

4.1 で示した（12）のように、JSL グループの学習者（J1）は接続詞を使って（発話）文を繋ぎ、複文を用いて日本語会話を行う傾向がある。このことから、JSL グループの学習者は情報の組み立てやまとまりのある内容を日本語で表現する談話能力に長けていると言える。また、発話文の途中において、「交替後継続部」では JFL グループの学習者が上回っていることから、JSL グループの学習者は発話が一時的に中断され、それを開始する際に感じる言語的負担が JFL グループの学習者ほど大きくないことが分かる。一方で、発話文の途中において、特に「発話中継続部」でフィラーが多用されていることは、JSL グループの学習者が発話を継続しようとする傾向を示している。

(a-3) フィラーの出現位置と形式について、JFL グループの学習者が全ての位置で一貫して「呃 (e ー)」を多用し、JSL グループの学習者が「返答開始部」で「え (ー)」、他の位置では「なんか」を多用する理由は、両者のコミュニケーション能力におけるストラテジー能力の違いに関連していると考えられる。ストラテジー能力は研究によって若干異なる定義が見られるが、本稿では、コミュニケーションが円滑に進まない場合に、言い換えや補足を用いて会話を修復・維持する力を指すものとする。

JFL グループの学習者は主に中国で日本語を学んでおり、日常的に自然な日本語に触れる機会が限られている。そのため、日本語会話におけるコミュニケーションを円滑にするためのフィラー使用の能力の発達が JSL グループの学習者に比べて遅れている。この結果、JFL グループの学習者は発話位置を問わず、母語である中国語で多用される「呃 (e ー)」に頼る傾向が強く

見られる。フィラーの使い方が統一的であることは、フィラーを使い分ける能力が十分に発達していないことを示唆している。

一方、JSL グループの学習者は長期間日本に滞在し、日常的に日本語を用いた多様なコミュニケーションに参加しているため、より自然な日本語表現やフィラーを身に付けている。その結果、彼・彼女らは無意識に文脈に応じたフィラーの使い分けを行っている。具体的には、「返答開始部」では「え (ー)」を多用し、ほかの発話位置では「なんか」を使用している。こうしたフィラーの使い分けは、JSL グループの学習者が自然な会話の流れを維持しながら自分の考えを効果的に表現する比較的高度なストラテジー能力を持っていることを示している。

さらに、「返答開始部」以外の発話位置で「なんか」が多用されている理由は、その多機能性に関連している。上田（2005）によると、「なんか」は話の曖昧さや強調、言い換えなど複数の機能を持ち、発話文の冒頭や途中で使われることが多い。このことから、JSL グループの学習者によるフィラーの使用は、単なる時間稼ぎや次に話す内容の調整に留まらず、より多様な機能を果たしていると考えられる。

以上をまとめると、学習環境の違いがフィラーの出現位置や機能、およびそこに現れるフィラーに大きな影響を与えることが明らかである。この結果は、岡崎（1987）の指摘、「日本語学習者の多くが抱える問題は談話能力に関連しており、その一因は教室内での学習環境が、実際の会話に対応する十分な練習の場となっていないことにある（p .165）」という見解を支持していると言える。すなわち、学習者がどれだけ自然な会話環境に触れるかが、フィラーの習得と使用に大きく関わっていることが示唆される。具体的には、JFL グループの学習者は主に教室内での日本語学習に依存しており、自然な会話に触れる機会が限られている。一方、JSL グループの学習者は日常生活で母語話者と直接対話する機会が多く、より多様なフィラーの機能を自然な会話の中で身につけたと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では、JFL と JSL の違いが学習者のフィラーの出現位置およびその機能にどのように影響するかを明らかにするため、中国人教室学習者を対象に、初対面の日本語母語話者との自然談話を用いて調査・分析を行った。その結果は以下のようにまとめられる。

(a-1) 発話文の冒頭：JFL グループの学習者は JSL グループよりフィラーの使用頻度が高い。

(a-2) 発話文の途中：JSL グループの学習者は JFL グループより高頻度でフィラーを使用している。「交代後継続部」では JFL グループの学習者が多用し、「発話中継続部」では JSL グループの学習者に偏りが見られる。

(a-3) フィラーの形式：JFL グループの学習者は全ての位置で「呃 (eー)」を多用し、JSL グループの学習者は「返答開始部」では「え (ー)」、他の位置では「なんか」を多用している。

(a-1) および (a-2) の理由は、両者の学習環境の違いによって培われた日本語のコミュニケーション能力、中でも特に談話能力の違いに関連しており、(a-3) の理由は、日本語のコミュニケーション能力における、ストラテジー能力に起因していると考えられる。

一方、本稿には残された課題もある。今後、考察しなければならないことを以下に示す。

1）本稿では、JFL と JSL グループの学習者のフィラー使用の違いに焦点を当てているが、フィラーの多様性や使い分けに関する詳細な分析はまだ十分ではない。特に、話題転換や次の発話内容の調整など、具体的な話者の意図や、日常会話、インタビュー、学術的なディスカッションといった会話の場面によってフィラーがどのように変化するのかは、今後の課題としてさらに探求する必要がある。また、フィラーの使用と接続詞や単文・複文の使用との関係についても、さらなる分析が必要である。

2）考察では、フィラー使用の違いが両グループの談話能力の差に関連していると結論付けているが、この談話能力の定量的な評価やその具体的なフィラーとの関係性についてはまだ明確ではない。今後は、発話の流暢さ（例えば、発話の中断回数や沈黙の長さ）、発話の長さ、話者間の相互理解度といった観点から談話能力を評価し、それとフィラー使用の相関をより具体的に分析する必要がある。

3）本稿では、フィラーの使用に学習者の個人差があることを指摘したが、それについては詳しく考察していない。また、学習者だけでなく、対話者や話題などの要因も考えられ、それらが学習者のフィラー使用にどのように影響を与えるのかを今後の研究で明らかにする。

注

1）本稿における「機能や役割」とは、フィラーがどのように使用され、何を達成するのか、すなわちフィラーが果たす具体的な働きや効果を指す。研究により、両者を区別して使用しているものがある。

2）このコーパスは、国立国語研究所、北京日本学研究センター、北京師範大学の三者が共同して構築したものであり、全部で 17 名の学習者のデータが含まれている。

3）「準備のない即席の話」とは、事前に準備された台本や計画に基づくのではなく、その場の状況や相手の反応に応じて、瞬時に考え、自然に発言する会話を指す。このような会話では、機転や創造力が求められ、その場に応じて柔軟に対応することが重要である。例えば、友人同士の雑談が即興性のある会話の一例である。また、『音声学大辞典』（三修社 1976：46-47）によると、フィラー（辞書では「言い淀み」という項目）は、発話全体の時間に対して、インタビューでは 50%、準備のない即席の話では 35%～ 60%を占めるとされている。

4）質問であることを表示する形式には、発話文末に疑問を表す助詞「か」がある場合や、上昇調イントネーション、確認要求表現なども含まれる。

5）「その他」には、「え (ー／っと)」「その (ー)」「そう (で) すね (ー)」「何っていうか」「あ (ー)」などが含まれる。

参考文献

石黒圭（2022）日本語学習者のフィラーの習得と評価―中国語を母語とする日本語学習者 3 名を対象にしたケーススタディー―」窪薗晴夫・朝日祥之編『言語コミュニケーションの多様性』、pp. 123-144、くろしお出版 .

上田有希子（2005）「話しことばの位相―会話におけるフィラーの研究―」『日本文學』101：163-183、東京女子大学 .

宇佐まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ 2019 年改訂版」https://ninjal-usamilab.info/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf 最終閲覧日 2023.04.24.

岡崎敏雄（1987）「談話の指導―初～中級を中心に―」『日本語教育』62：165-178.

葛欣燕（2015）「機能に基づく日本語フィラーの使用実態―中国人日本語学習者と日本語母語話者との対照に着目して―」『地球社会統合科学研究』2：35-44、九州大学大学院地球社会統合科学府 .

葛欣燕（2020）「日本語フィラーと中国語フィラーの機能に関する対照研究」九州大学大学院地球社会統合科学府、博士論文. https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?lang=1&amode=MD823&bibid=4060252 .

加藤豊二（1999）「談話標識『まあ』についての一考察」『日本語・日本語教育論集』6：21-36、名古屋学院大学 .

小西円（2018）「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」『国立国語研究所論集』15：91-105、国立国語研究所 .

迫田久美子・細井陽子（2020）「異なった学習環境における日本語使用の正確さと複雑さ―日本語学習者コーパス（I-JAS）の分析に基づいて―」『計量国語学』32(7)：403-418.

塩沢孝子(1979)「日本語の Hesitation に関する一考察」F.C. パン編『ことばの諸相』pp. 151-166、文化評論出版 .

中島悦子（2011）『自然談話の文法―疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞―』おうふう .

日本音声学会編（1976）『音声学大辞典』三修社 .

百瀬みのり（2018）「指示詞系フィラーの出現位置―インタビュー談話における―」『待兼山論叢文学篇』52：55-76、大阪大学大学院文学研究科 .

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版 .

刘晓露（2023）「中国人日本語学習者のフィラーの使用実態に関する研究―「あのー」「えーと」「まあ」「なんか」を中心に―」大连外国语大学日本语学院、修士論文 .

冷羽涵（2024）「中国人日本語教室学習者の日本語談話におけるフィラーの使用に関する一考察―第二言語環境習得と外国語環境習得の違いに注目して―」『阪大日本語研究』36：91-115、大阪大学大学院人文学研究科基盤日本語学講座 .

外国語の文献

Ellis, R. (1994). The Study of Second Language Acquisition. Oxford: Oxford University Press.

Iwasaki, N. (2011). Filling social space with fillers: Gains in social dimension after studying abroad in Japan. Japanese Language and Literature, 45-1, 169-193.

Pica, T. (1983). Adult acquisition of English as a second language under different conditions of exposure. Language Learning, 33, 465-497.

記号凡例

。	1 発話の終わり。1 発話文の印。
„	発話文の途中に相手の発話が入り、前の発話が終わっていないこと。
、	①日本語表記の慣例、②発話と発話の間に短い間がある場合。
？	疑問文。
［ ］	文脈情報。
＜＞ {<} ＜＞ {>}	重ねられた発話には、< >{<}。 重ねた発話には、< >{>}。
【【 】】	第 1 話者の発話文が完結する前に、第 2 話者の発話により、結果的に第 1 話者の発話が終了したこと。

（宇佐美 2019：16-18 より　一部の記号の説明は筆者による加筆）

（博士後期課程学生）

（2024 年 8 月 19 日受付）
（2024 年 12 月 23 日掲載決定）